

「ブレットド・ラブ」

眞喜志 樹

## 登場人物

小島夏海（30） 音羽中学校・教師（一年・理科）。

堂本 学（24） フリーター（デリバリー業）。

新井加奈子（24） 音羽中学校・教師（一年・数学）。

花田良平（27） 音羽中学校・教師（一年・国語）。

松宮聖菜（30） 音羽中学校・教師（一年・数学）。

小島美紀（54） 夏海の母。

木村幸三（61） 『パン職人・木村』の店主。

○ 音羽中学校・外観（6月／午前）

○ 音羽中学校・一年二組教室

小島夏海（30）、四十人くらいの生徒  
の前で理科の授業を行っている。

○ 『パン職人・木村』・店内

店主の木村幸三（61）、堂本学（24）  
に商品が入った袋を渡す。  
学、それをリュックの中に入れる。

○ 音羽中学校・一年二組教室

夏海、変わらず授業を行っている。

○ 道

学、バイクを運転している。

○ 音羽中学校・外観（昼）

チャイム音。

○ 同・廊下

夏海、何人かの生徒とすれ違いながら真っ直ぐ歩く。

○ 同・正門前

学が運転しているバイクが停まる。  
門は閉まっている。

学 「なんで学校なんだ……」

学、インターホンを押そうとし、

声 「やめて！」

学 「！」

夏海、正面の校舎から出て来る。

夏海 「デリバリーの方ですよね」

学 「はい。小島夏海さん？」

夏海 「ええ。五百円だったわよね（と五百円

玉を渡す）」

学 「（受け取り）ありがとうございます。

少々お待ちください」

学、リュックから商品を取り出す。

夏海 「さつきは大声出してごめんなさい。他の先生にデリバリー頼んでるの知られたくなくて」

学 「え？」

夏海 「ほら、教師の昼ご飯がデリバリーって、ちよつとズルい感じあるでしょ」

学 「ああ。あ、こっちこそすいませんでした」

夏海 「ううん（と受け取り）ありがとう」

夏海、出て来た校舎とは違い、駐車場の方向へと歩いて行く。

学 「ありがとうございました」

### ○ 同・正門く駐車場までの道

夏海、ご機嫌で歩いているが、袋からの匂いに違和感を覚え、

夏海 「（袋の中を見て）！」

### ○ 同・正門前

学、バイクに跨りスマホで次の配達を探している。

学 「次は…お、この近くだな」

夏海、戻って来る。

夏海 「（不機嫌で）ちよっと！」

学 「ビックリした。どうかされましたか？」

夏海 「どうかされましたじゃないわよ。これ

何？」

学 「え？」

夏海、袋を学に見せる。

学 「（中を見て）あ…」

袋の中はハンバーガーと飲み物が入っており、ハンバーガーの包み紙からは具材が溢れている。

学 「…（中身を見ている）」

夏海 「もしかしてこれ、途中で一回落とした？」

学 「いえ、そんなことは…」

夏海 「お店側はちゃんと作ったのを渡すんだから、こうなるとすれば運んだあなたしかいないじゃない」

学 「（納得いってないが）……申し訳ございませんでした。お店に戻ってすぐ新しいものを――」

夏海 「そんな時間ないわよ。もういいわ」

夏海、袋を持って校舎の方へ入って行く。

学 「まったく、俺じゃねえよ……あ、お金。

まあいいか、あんな奴に返さなくても」

学、スマホを見る。

近くの体育館から片付けを終えた新井加

奈子（24）が出て来る。

加奈子 「（学を見て）？」

学、バイクで走り去る。

加奈子 「（学が去った方を見ている）」

## ○ 同・廊下

夏海、歩いている。

夏海 「ホント最悪」

夏海、ゴミ箱に袋を投げ捨てる。

○ タイトル『ブレット・ラブ』

○ 音羽中学校・外観（時間経過・放課後）

チャイム音。

○ 音羽中学校・職員室（放課後）

職員室には加奈子と花田良平（27）、他数名の教師が仕事をしている。

良平「（伸びをして）終わった〜（と隣の加奈子を見る）」

加奈子「……（作業を続けている）」

夏海と松宮聖菜（30）、入って来て自分のデスクへ（四人のデスクは近い）。

良平「（二人に）お疲れ様です。あれ、今日はバスケ部終わるの早いですね」

聖菜「まあテスト近いし、いつもみたいにあんまり遅くまでやるのはちよつとね。



（加奈子に）新井先生どう？ もう終わりそう？」

加奈子「はい。今、半分くらいまでできあがったので、この調子でいけば六時までに何とか終わらせられそうです」

聖菜「そう。ごめんね、一年目から早速テスト作らせたりさせて」

加奈子「いえ。見てるより自分で実際やった方が早く身につきますから、とてもありがたいです」

聖菜「そう言ってもらえると、指導者の気持ちが楽になるわ」

良平、夏海の元へ。

良平「小島先生。この後何かありますか？  
何もなかったら一緒に――」

夏海「すみません。私も今からテスト作らなきゃいけませんので」

夏海、パソコンを起動させる。

良平「……そうですか。じゃ、お先に失礼します」

夏海 「お疲れ様でした」

良平、周りに挨拶しながら出て行く。

夏海、パソコン作業をしている。

聖菜 「本当は昨日に終わらせておくせに」

夏海 「……バレてた？」

夏海、パソコンをシャットアウトする。

聖菜 「いい加減ご飯くらい行ってあげたら？」

どうしてそんなに花田先生を避けるのよ」

夏海 「……今から新井先生も一緒に、三人で

バーツと飲みに行こ」

加奈子 「え、私はこれがまだ……」

夏海 「もうそんな真面目な事言っていないで。

まだ期限あるんだし、今日はおしまい」

### ○ ダイニングバー・店内（夜）

店内は女性客を中心に賑わっている。

テーブル席に着いている夏海、加奈子、

聖菜。

テーブルの上には料理やお酒が置いてあり、夏海はハンバーガーを食べている。

聖菜「誘った張本人は早速ハンバーガー……」

夏海「（食べながら）だってお昼食べられなかったんだもん。あの生意気配達員のせいだ」

聖菜「配達員？」

× × ×

フラッシュ。

スマホを触っている学。

× × ×

加奈子「……（思い出している）」

夏海「包み紙から具材溢れていき、それ言ったら「え、僕ですか？」みたいな顔してきたの。信じられないでしょ。あなた以外誰がいるのよ。あく思い出したらまたイライラしてきた」

聖菜「一人でデリバリーなんか頼むから、罰が当たったのよ。もうこれを機に教頭先生が注文するお弁当にきなさい」

夏海「お米は太るから嫌」

聖菜「ハンバーガーよりはマシよ」

加奈子「……小島先生、もしかしてその配達員って八重歯でした？」

夏海「ん〜どうだったかな。覚えてない……何、知り合い？」

加奈子「いえ……あ、私やっぱり今日中にテスト作っておきたいので、これで失礼します」

加奈子、財布から二千円を取り出し、テーブルの上に置いて出て行く。

夏海・聖菜「……」

○ 同・入口前

加奈子、電話をかけている。

加奈子「（繋がり）もしもし？」

○ 同・店内

夏海と聖菜。

聖菜「で、夏海はどうして花田先生を嫌っているわけ？」

夏海「え？ 別に嫌ってなんか……」

聖菜「恋愛経験少ない夏海でもわかるでしょ。

花田先生の好きな人」

夏海「一言余計よ。私だってそれなりの恋愛はしてるから」

聖菜「良い人だと思うけどなく。少しどころさそうだけど」

夏海「じゃあ聖菜が結婚しなよ」

聖菜「（左手の指輪を見せて）私はもう既婚者で子供もいるから」

夏海「いいなく」

聖菜「嘘。そんなこと一ミリも思っていないでしょ」

夏海「（苦笑し）別に恋愛くらいならいいんだけどね。でも……結婚だけはしたくないの」

### ○ B A R ・ 店 内

加奈子、テーブル席に着いている。

学、入って来て加奈子を探す。

加奈子、手招きする。

学 「（席に着き）悪い、遅くなつて」

加奈子 「ううん。コーラ頼んどいたよ。どう

せバイクなんでしょ」

テーブルにはコーラと加奈子のお酒。

学 「久しぶりなのによく覚えてたね」

加奈子 「卒業以来だから、まだ三ヶ月しか経  
つてないじゃない」

学 「あ、そっか……仕事は慣れた？」

加奈子 「まだ全然」

学 「まあ、あんまり無理すんなよ」

加奈子 「ありがとう」

学 「で、話って何？」

加奈子 「学、今日もしかして音羽中学校に来  
てた？」

学 「え、なんで知ってんの？」

加奈子 「たまたま見かけたから、やっぱり学  
だったんだね」

学 「じゃあ、あの先生とのやり取りも？」

加奈子 「それは見てないけど、さつき当事者  
が話してたから大体は……」

学 「絶対俺じゃねえのに」

加奈子「……やっぱり学に配達員は似合わないよ」

学 「え？」

加奈子「教授（\*教員採用試験）の勉強はしているの？」

学 「……いや」

加奈子「教師、もう目指さないの？」

学 「……わかんない」

加奈子「どうして？ 学なら絶対にいい先生になれるのに」

学 「（苦笑し）どうだか……」

加奈子「……あ、そうだ。明日からさ、学の家で勉強会やろう」

学 「は？」

加奈子「私が学の先生やるから。ね？」  
学 「……」

○ 『パン職人・木村』・店内（翌日・朝）

幸三、パンを並べている。

夏海、入って来る。

幸三「いらつしやい。お、夏海ちゃん。おはよう」

夏海「おはよう、幸三さん」

幸三「今日は朝ご飯を買いに来たのか？」

夏海「ううん、昼ご飯」

幸三「ん？ お昼はあのなんとかってアプリで注文するんじゃないかったのか？」

夏海「……ちよつとね」

幸三「お、さてはこつそり注文してるのが学校にバレたな」

夏海「まあ、そんなところ」

幸三「気をつけないと……それはそうと、昨日のは少し入れ過ぎだったな」

夏海「え？」

幸三「（独り言のように）いや、あれだと運んでいる最中で崩れるんじゃないかって、渡した後に気づいてな」

夏海「どういうこと？」



幸三「あれ、気づかなかったか？ 昨日のハンバーガー、いつもより多めに野菜入れたんだが……もしかして食べてないのか？」

夏海「……ううん。ちよつとド忘れ。美味しかったよ」

幸三「そうか。良かった」

夏海、扉の方へ向かう。

幸三「夏海ちゃん、ハンバーガーは？」

夏海「やっぱりデリバリーにする……あ、私はいつもの量の方が好きだから、そっちでよろしく」

夏海、出て行く。

幸三「……」

### ○ 道（午前）

学、バイクを運転している。

スマホから着信音。

学、バイクを路肩に停め確認する。

『パン職人・木村』から。

学、ポケットから五百円玉を取り出し、

学 「……」

○ 音羽中学校・正門前（昼）

学の運転するバイクが停まる。

学 「！」

夏海がいる。

夏海 「……どうも」

学 「……こんにちは」

夏海 「……今日は遅かったわね」

学 「……慎重に走ってきましたから」

夏海 「そう……」

学、リュックから商品を取り出す。

夏海 「……ごめんね」

学 「え？」

夏海 「昨日のハンバーガー、あれあなたのせ

いじゃなかった」

学 「……」

夏海 「あなたのプライド、傷つけるようなこ  
と色々言っって、本当にごめんなさい」

学 「……いや、あれは自分のミスですよ。

僕こそ昨日はすみませんでした」

学、商品を渡す。

夏海 「あ、五百円（と財布を取り出す）」

学 「いいですよ。昨日の返金しそびれちゃったのがあるから（と五百円玉を取り出し）これで」

夏海 「ダメよ。あれはあなたのミスじゃないんだから、ちゃんと今日の分は払わないと」

夏海、五百円玉を学に渡す。

学 「（受け取り）では」

夏海 「ありがとう」

夏海、袋の中を見る。

夏海 「あれ……？」

学 「どうしました？もしかしてまた中身出てますか？」

夏海 「ううん、そうじゃない。一つしか頼んでいないのに……」

学 「（袋の中を見る）……」

ハンバーガーと飲み物、二つずつ入っている。

夏海 「(学を見て) ……」

学 「? (嫌な予感) ……」

### ○ 同・駐車場

数台の車とバイクが停まっている。

### ○ 夏海の車の中

運転席に夏海、後部座席に学がいる。

二人、ハンバーガーを食べながら、

学 「なんで俺も食べないといけないんですか」

夏海 「だって私二つも食べられないもん」

学 「じゃあ他の先生にでもあげればいいじゃないですか」

夏海 「そんなことしたらデリバリー頼んでるの周りに知られるじゃない。もう男のくせにごちやごちやうるさいわね」

学 「男は関係ないでしょ。だからここで食べてるんだ」

夏海 「学校の先生って、一人の時間はトイレくらいしかないの。朝の八時から夕方六時まで十時間、常に誰かと一緒にいて結構疲れるのよ」

学 「あ、それはすごいわかるかも」

夏海 「え？」

学 「俺も一人の時間がないと嫌な人間だからさ」

夏海 「ふくん。だからこのバイト？」

学 「まあね」

夏海 「学生？」

学 「いや。大学は今年の三月卒業して、今はただのフリーター」

夏海 「何か夢でもあるの？」

学 「（苦笑し）そんなカッコいいもんじゃないですよ。俺落ちたんです、教採」

夏海 「え、教育系？」

学 「親がどっちとも教師なんですよ。それで自分もなんとなく教師になろうとして、なんとなく教育大行って、なんとなく教授を受けたけど、落ちちゃって……」

夏海 「……」

学 「あ、別に同情とか慰めの言葉はいらないですよ。落ちたって知ったときも、特に悔しいとかそんな感情湧いてこなかったし。親も俺が教師になるの、そんなに望んでいなかったみたいだし。今は自由業でのんびり暮らしてます」

夏海 「……いいわね」

学 「羨ましいんですか？」

夏海 「少し……」

学 「……」

夏海 「……（時計を見て）そろそろ生徒が出て来る頃だわ」

学 「わかりました」

学、片付けて車から出る。

学 「（窓の外から）ご馳走様でした」

夏海「明日もよろしくね」

学「はい……って言っても俺かどうかわかりませんけど」

学、バイクを押して正門の方へ向かう。

夏海「そういう道もありだったのかもね」

### ○ 音羽中学校・廊下

夏海、聖菜、加奈子、教室に向かって歩いている。

聖菜「今日はちゃんと食べれたの？」

夏海「うん」

聖菜「配達員は昨日と同じ？」

夏海「うん」

聖菜「（夏海をじっと見て）……」

夏海「何よ」

聖菜「随分機嫌いいわね。何か良いことでもあった？」

夏海「え……別に」

加奈子「（夏海を見て）……」

○ 同・外観（時間経過・放課後）

チャイム音。

○ 同・職員室

教師たち、仕事をしている。

夏海「（聖菜に）お先」

聖菜「早いね（とカレンダーを見て）あ、今日十五日か」

夏海「多分もう家に……」

良平「小島先生。この後一緒にご飯でもどうですか？」

夏海「ごめんなさい。友達との約束があるので……」

良平「……そうですか。じゃあまた今度」

夏海「はい。お疲れ様でした」

夏海、他の教師たちに挨拶をしながら出て行く。

良平「（加奈子に）恋愛って難しいですね」

加奈子「……花田先生、私でしたらこの後空いていますよ」



良平「え？」

聖菜、二人の会話が聞こえていて、

聖菜「(まさか)！」

○ アパート・駐車場(夜)

車が停まり、夏海、降りる。

夏海、自分の部屋の灯りが点いているのが見え、

夏海「(察しはついていて)……」

○ 同・夏海の部屋

小島美紀(54)、キッチンで料理をしている。

夏海、入って来る。

夏海「今日も来てたか……」

美紀「帰ってきて一言目がそれ？　まずはただいまでしょ」

夏海「……ただいま」

美紀「はい、おかえり。もうすぐでできるからね」

夏海「別にご飯くらい私一人でできるのに」

美紀「こんな食生活している子が何言っているのよ（とゴミ袋を見る）」

ゴミ袋はデリバリーの空箱だらけ。

夏海「……」

×

×

×

食卓には美紀が作った（白身魚の煮つけなど）和食が並んでいる。

夏海、美紀、食べながら、

美紀「美味しい？」

夏海「……うん」

美紀「……今日は帰って来るの早かったわね。部活は？」

夏海「テスト前だからない。そんなの元教師のお母さんだったらわかると思うけど？」

美紀「……そうね」

夏海「……（黙々と食べている）」

美紀「……」

夏海「今日は結婚の話しないんだ」

美紀「え？」

夏海「いつもしてるから、なかったらないで  
変な感じするね」

美紀「その話したら嫌な顔するじゃない」

夏海「まあね」

美紀「……なんでそんなに結婚を拒むの？」

夏海「めんどくさいから」

美紀「だから結婚の何がめんどくさいのよ？」

夏海「絶対求めてくるからよ、子供を……ご

めんなさい、親不孝な娘で」

美紀「……」

### ○ B A R ・ 店 内

加奈子と良平、テーブル席で飲んでいる。

良平「いや、嬉しいですね。まさか新井先生

から誘っていただけるなんて」

加奈子「……別にそういう意味じゃないです

から。ただ、花田先生とは利害が一致し

ているんじゃないかな。って思いました」

良平「どうということ？」

加奈子「小島先生、多分好きな人いますよ。」

残念ながら花田先生じゃありませんけど」

良平「……なんでそんなことわかるの？」

加奈子「だって午後からの小島先生、女の顔  
になってましたから。あれ多分、昼休み  
に好きな人と会ってたんです」

良平「……そうなんだ」

加奈子「……私、良い計画思いついたんです  
けど乗ってみますか？ 花田先生にはメ  
リットしかありませんよ」

良平「え？」

### ○ 音羽中学校・外観（翌日・朝）

### ○ 同・職員室

夏海と聖菜、他数名の教師が授業準備を  
始めている（加奈子と良平はまだ来てい  
ない）。

聖菜「昨日はどうだったの？」

夏海「いつも通りよ。和食食べながら無駄な結婚話して終わり」

聖菜「また喧嘩したんだ。お母さんはよっぽど夏海の結婚を望んでいるんだね」

夏海「孫の顔見たいだけなんじゃない」

聖菜「……そうだ。昨日さ夏海が帰った後……（と辺りを見回し小声で話す）」

夏海「え？ それって……」

聖菜「もしかして……かも」

良平、挨拶しながら入って来る。

良平「（二人に）おはようございます」

夏海・聖菜「……」

良平「？ ……」

○ 『パン職人・木村』・前（午前）

バイクが停まる。

○ 同・店内

学、入って来る。

学「おはよう〜」

幸三、学を見つけ厨房から出て来る。

幸三「おはよう。ん、今日はまだ注文入っていないが？」

学「いや、今日は配達員じゃなく客として。ハンバーガー以外にも何が美味しいのかな  
〜って」

幸三「（少し言葉に引っかかりを感じ）ここはどれも美味しい。なんせ全ての食材にこだわっているからな」

学「それは失礼。じゃあ何がオススメ？」

幸三「…：メロンパンだな。中にメロンの果肉がこれでもかかってくらい入っている」

学「美味そう。じゃあそれ一つ―」

店内の端末からデリバリ―注文の着信。

幸三「（端末を見て）お、夏海ちゃんからだ。ん、今日もまた二つ注文しているな」

学「…：」

幸三「一緒に食べる人でもできたのかな…：  
そうだ。今日は新作にしよう」

学 「作る側が勝手に決めちゃっていいんですか？」

幸三 「夏海ちゃんは特別だ。ちよつと食べながら待っててくれ」

幸三、厨房に戻っていく。

学 「運ぶんであんまり高さのあるものとかやめてくださいよ」

学、メロンパンをトングで掴み、

学 「（一口食べ）美味しい！」

### ○ 音羽中学校・正門前（昼）

夏海がいる。

### ○ 同・正門近くの校舎

加奈子、良平、隠れて夏海を見ている。

二人とは少し離れたところに聖菜。

良平 「本当にこんな計画で上手くいきますかね」

加奈子「大丈夫です。恋は盲目って言葉があるじゃないですか。人は恋に落ちると冷静にモノが見れなくなるんです」

良平「……」

聖菜「（聞こえていて）……」

### ○ 同・正門前

学の運転するバイクが停まる。

夏海「どうも」

学「別に門の前になくても、インターホン押しませんから」

夏海「まだあなたのことそこまで信じていないから」

学「あ、そう」

夏海「なーんて、冗談。もうお腹ペコペコで待ちきれなくて」

学「言ってること、中学生と同じですよ」  
学、商品を夏海に渡す。

夏海「ありがとう（と五百円を渡す）」

学「（受け取り）はい」



夏海 「(中身を見て) あれ、また二つ入って  
る……」

学 「……」

夏海 「幸三さん、ボケてきたのかな」

学 「……まあ、いいですよ」

夏海 「あら、まだ何も言っていないけど？」

声 「学！」

加奈子、出て来て学の手を掴む(繋ぐ)。

夏海 「！」

学 「加奈子」

加奈子 「偶然だね。何してるの？」

学 「(加奈子の手を外しながら) 何って、

ただのバイト」

加奈子 「ふうん。じゃあ私もデリバリー頼ん

だら学が来てくれるの？」

学 「さあ、わかんない」

加奈子 「あ、今日の夜さ、前約束した勉強会

やろうよ」

学 「はあ？ てかあれ決まりなの？」

加奈子 「(チラッと夏海を見る)」

夏海「……あ、私お邪魔みたいね。（学に）

これありがとう」

夏海、駐車場の方へ向かう。

学「（夏海に声をかけようとするが）……」

加奈子「勉強会どこでやる？ 私の家来ても

いいよ」

学「（加奈子を見て）……」

学、バイクで走り去る。

加奈子「……」

聖菜、近くで見ている、

聖菜「……」

### ○ 夏海の車の中

夏海、運転席に座っている。

助手席にはハンバーガーが入った袋。

夏海「（自嘲気味に）まあ、あんな顔だった

ら彼女の一人はいて当然よね」

夏海、ハンバーガーを食べ始める。

### ○ 音羽中学校・駐車場近くの校舎

良平、夏海を見ている。

○ 道

学、バイクを運転している。

学 「……」

○ 音羽中学校・外観（時間経過・放課後）

チャイム音。

○ 同・職員室

教師たち、仕事をしている。

良平、帰りの支度が終わり、

良平「じゃあお先に失礼します」

加奈子「お疲れ様でした」

良平、去ろうとする。

聖菜「（良平に対して）？」

夏海「……花田先生」

良平「はい（と立ち止まり）」

夏海「この後何かありますか？」

良平「え？ 何もありますけど……」

夏海「……」

○ 同・正門近くの校舎

加奈子、夏海の車が出て行くのを見ている。

聖菜の声「やってくれたわね」

加奈子「！（と振り返る）」

聖菜、加奈子の側へやって来て、

聖菜「今時の若い子って随分幼稚なことやるのね。これもゆとり教育のせいかしら」

加奈子「でも十分効果はありましたよね」

聖菜「……」

加奈子「元はと言えば、他人ひとの気持ちに気づいていない小島先生がいけないんですよ」

聖菜「へえ、新井先生とあの配達員って付き合ってたんだ」

加奈子「そうですよ」

聖菜「なーんだ。私は元恋人だって思ったんだけど。気のせいかな」

加奈子「……結婚されているわりには、そういうの疎いんですね」

聖菜「結婚したからこそ疎くなったのかも。」

新井先生は詳しいのね」

加奈子「少なくとも松宮先生よりかは」

聖菜「ふん……」

加奈子、一礼して去ろうとする。

聖菜「じゃあ当然、アレにも気づいているのよね？」

加奈子「（立ち止まり）なんのことですか？」

聖菜「あら、気づいていないの？ 私たち、

大きな勘違いをしているわよ」

聖菜、立ち去る。

加奈子「……？」

### ○ お洒落なレストラン・店内（夜）

テーブル席に着いている夏海、良平。

夏海は既に酔っぱらっている。

良平「大丈夫ですか？」

夏海 「ん？ 大丈夫ですよ。飲んでも運転し  
なければいいんです（と酒を飲む）」

良平 「……それにしてもいいお店ですね。料  
理は美味いし、お酒はよく合ってるし」

夏海 「好きな人と来るにはオススメのお店ら  
しいですよ」

良平 「そうなんですね……」

夏海 「（また一杯飲む）」

良平 「……小島先生」

夏海 「（更に酔いが回り）なんですか？」

良平 「僕はあなたにどうしても言わなければ  
いけないことがあります。これは人とし  
て、男としてです」

夏海 「……」

良平 「僕は……あなたのことを……ちよつと、  
小島先生？」

夏海 「（眠っている）」

○ 『パン職人・木村』・厨房

ちよつとしたスペースで、学と幸三、パンを食べている。

幸三「悪いね、一緒に食べてもらって」

学「いや、貧乏なんで助かります」

幸三「学君だったっけ？ 君はどうしてフリーターをやってるんだ？ 何か夢でもあるのか？」

学「特にないですけど」

幸三「夢はあった方がいいぞ。なんとなくの夢でも、叶わない夢でも」

学「おじさんは今まで叶ったことあるの？」

幸三「ああ。俺の家族と一緒に、両親から引き継いだ店をやる。子供の頃からの、なんとなくの夢だったが叶った」

幸三、側に置いてあった写真を見る。

写真は店の前で撮った幸三とその妻、そして夏海（10）が映っている。

学「凄いですね」

幸三「ただ欲を言えば、もっと一緒にやりたかったんだけどな……」

学 「……それが叶わなかった夢？」

幸三 「それもだが、一番は……子供ができなかった」

学 「え？ じゃこの写真の子は？」

幸三 「それは夏海ちゃんだ。どうしても一緒に映りたいって言ってきてな」

学 「……」

幸三 「妻は子供のできにくい身体だった。結婚前からその事は聞かされていて、俺の親から結婚は猛反対だったよ。もし子供ができなかったら、継ぐ人間がいなくなるからな」

学 「……」

幸三 「でも後悔はしていないぞ。これ以上ない最愛の人と出会えたんだから。それだけでも十分だ」

学 「いいですね……けどなんか勿体ないな。こんな美味しいパンを作る人が、おじさん以外誰もいないなんて」

幸三 「他にも店を出しておくんだったな」



学 「……」

店内の端末からデリバリー注文の着信。

幸三 「しまった。終了時刻の変更するのを忘れていた（と端末を見る）」

学 「大丈夫ですか？ 俺でよかったですら手伝いますよ」

幸三 「ありがとうございます。幸い食材は残っているし、大丈夫だ」

学 「じゃあ出来たら俺が持っていくます」

幸三 「ああ、よろしく頼む」

### ○ アパート・前

学の運転するバイクが停まる。

近くにタクシーが停まり、夏海が降りてくる。

学 「（夏海を見つけ）！」

夏海 「（少し酔いっつも）ご馳走様でした」

良平 「運転代行、呼んでおきましたんで」

夏海 「ありがとうございます」

良平 「……小島先生」

夏海 「はい」

良平 「……もっと素直になりましょう。僕も

小賢しい手を使うのはやめます」

夏海 「？」

良平 「ではまた来週。おやすみなさい」

夏海 「おやすみなさい」

タクシー、走り去る。

夏海 「どういう意味？ （学に気づき）！」

学 「……どうも」

夏海 「（リュックを見て）仕事？」

学 「はい」

夏海 「……遅くまでご苦労様」

夏海、自分の部屋に向かう。

学、その後が続く。

夏海 「配達の後には彼女さんに愛をお届け？

人生充実してるわね」

学 「は？ 何言ってるの？」

夏海 「新井先生、あなたの彼女でしょ」

学 「もう彼女じゃねえよ」

夏海 「もう、ってことは、前はお付き合いられたんだ」

学 「……そっちこそ彼氏さんとデートだったみたいで。羨ましいな」

夏海 「そうなの。彼ね、とっても優しいの。今日は高いダイナーご馳走してくれて。楽しかったな」

学 「それは良かったですね。このまま結婚しちゃったらどうですか？」

夏海 「ちよつと、あなたいつまで私に付き合ってくるのよ」

学 「だってここだもん」

夏海 「は？」

二人、夏海の部屋に着く。

学、インターホンを押す。

「はい？」の声が返ってくる。

学 「デリバリーです」

夏海 「(まさか)」

中から美紀が出て来る。

夏海 「お母さん……」

学 「お母さん？」

美紀 「美紀。おかえり」

夏海 「……」

### ○ 同・夏海の部屋

食卓についている夏海、学、美紀。

美紀の前にはパンが置いてある。

夏海 「ホント最悪。（学に）なんであなたまで入ってきてるのよ」

学 「だって……（と美紀を見る）」

美紀 「彼氏を招待するのは当然でしょ」

夏海 「だから彼氏じゃないって」

美紀 「隠さなくていいわよ。もう夏海もいい歳なんだから。恋人の一人いたって私は反対しないわ」

夏海 「……ダメだ。何言っても通じない」

学 「……二人っていつもこんな感じなんですか？」

美紀 「あ、ごめんなさい」

夏海 「（学に）関係ないでしょ」

美紀「（夏海に）私も悪かったって思ってるわよ。そりゃ好きな人を部屋に呼ぶときは、片付ているときの方がいいわよね」

ゴミ袋には相変わらずデリバリーの空箱。

夏海「そういうことじゃないから！」

美紀「（パンを食べて）うん。久しぶりに食べたけど、やっぱり幸三さんのパンは美味しいわね。ほら、夏海も食べたなら？」

学さんもよかったらどうぞ」

夏海「私はもう済ませてきたから」

学「俺もさっき食べてきましたんで。前にもここのパン食べたことあるんですか？」

美紀「ええ。昔あの近所に住んでいて、その時よく食べていたんです」

学「うわ、それいいですね」

夏海「……よく言うわよ。お母さんはほとんど食べたことないくせに」

美紀「失礼ね。あるわよ」

夏海「外食とスーパーのお惣菜のお腹に、いつどこに入れてたのよ」

美紀「……」

夏海「私は食べてる。小っちゃいときからずつと……学校から帰ってきたら誰もいない、用意されているご飯もない。あるのは千つて書かれた紙きれ一枚だけ」

美紀「……」

夏海「幸三さんは毎日パンばかりの私に色々作ってくれた。栄養のことを考えながら、パンを嫌いにならないように……お母さん、知らなかったでしょ？」

美紀「……夏海。子供の時のことは謝るわ。」

お父さんもお母さんも仕事が忙しくて、あなたに構っていられなかったの。すごく反省しているわ……でも、だから今こうやって――」

夏海「なんで今なのよ！」

美紀「……」

夏海「なんで今なの？ お父さんが亡くなつて寂しいから？ 教育現場から退いて時間があるから？ 遅いわよ！」

美紀「……」

学「……もうその辺にしておこ」

夏海「小学校のとき、一回でいいから、家で迎えてほしかった。一回でいいから、ご飯を用意していてほしかった……」

美紀「……」

夏海、出て行く。

### ○ 夏海の車の中

運転席に座っている夏海。

夏海「……」

### ○ アパート・夏海の部屋

学と美紀。

学「……大丈夫ですか？」

美紀「（嘲笑して）夏海の言う通りね」

学「え？」

美紀「私、今さら何やってるんだろう。勝手に娘の家に上がり込んで、洗濯やって料

理作って、デリバリー頼んで……自己満  
足もいいところよね」

学 「……もしかしてデリバリー頼んだのっ  
て、娘さんの気持ちを知るためですか？」

美紀 「（ゴミ袋を見て）あの子があんな食生  
活になったのも、結婚をしたくないのも、  
全部私たちがいけないんです」

学 「……」

美紀 「私たちがもっと愛情を向けていれば、  
あの子も今頃結婚して子供もいたかもし  
れないのに……私たちは最低の親です。

他人<sup>ひと</sup>を育てる仕事をしていたのにね」

学 「……うーん。そうですかね？」

美紀 「え？」

学 「だって親の事、本当にそう思ってるな  
ら鍵なんか渡さないと思いますよ」

美紀 「……」

学 「なんだかんだ言っても、本心は来てく  
れるの嬉しいんじゃないですか。別に遅



くなんかありませんよ……って、何俺偉  
そんなこと言ってんだろう。すいません」

美紀「いえ……ありがとうございます」

学「……」

### ○ 夏海の車の中

美紀が夏海の部屋から出て来る。

夏海と美紀、目が合う。

美紀「（軽く微笑む）」

夏海「……」

美紀、手を振り去っていく。

夏海「……」

### ○ アパート・夏海の部屋

夏海、入って来る。

学、ぼんやりと座っている。

学「おかえり」

夏海「あなたも帰りなさいよ」

学「だって俺、ここの鍵持ってないから」

夏海「こんな部屋誰も入らないわよ」

学 「……まあ、あなたに一個言っておきた  
いことがあったからさ」

夏海 「何？」

学 「今日の昼間のアレ、本当になんでもな  
いから。加奈子とはもうそんな関係じゃ  
ないから」

夏海 「……それさつきも聞いたわ。そんなこ  
と言うためにわざわざ私を待ってたの？」

学 「……じゃあ」

学、出て行く。

夏海 「……」

○ 同・前

学、電話をかけている。

学 「……（繋がり）悪い、こんな時間に。  
明日会えないかな？」

○ ダイニングバー・店内（翌日・昼）

テーブル席に着いている夏海、聖菜。  
二人、食べながら、

聖菜「そう、そんなことが……それは大変だったね」

夏海「まだ五回も会ってない男の前で、私な  
んであんなこと話しちゃったんだろう」

聖菜「好きだからよ、その配達員のこと  
この人ならさらけ出してもいいって心の  
どっかで思ってるのよ」

夏海「別にそんな風に思っていないんだけどな  
」

聖菜「……ねえ、本当にその配達員に対して  
何とも思わないの？」

夏海「……当然でしょ」

聖菜「……夏海」

夏海「何よ」

聖菜「いつまで恋から逃げるの？」

夏海「……」

聖菜「そりゃ恋愛すれば次は結婚、その次は  
子供って話になるかもしれないよ。でも  
ちゃんと夏海の気持ち話せばわかってく  
れるかもしれないじゃない。最初から諦

めないで、いい加減正直になりなよ。好きなんでしょ？ その配達員のこと」

夏海「……」

夏海のスマホにLINEの着信音。

夏海「（スマホを見て）！」

### ○ カフェ・店内（昼）

学と加奈子、テーブル席に着いている。

加奈子「学から連絡貰えるなんて嬉しい。今

日はここで勉強会する感じ？」

学「……加奈子。二人だけで会うのはこれで最後にしよ」

加奈子「え？」

学「加奈子には感謝してる。俺に前向いて歩かせるために、こんな勉強会やろうとしてくれてたんだろ？ ありがとう。その気持ち、すごい嬉しい……でも俺、やっとなんか言うか、やりたいこと見つかったからさ」

加奈子「……」

学 「……それに加奈子にはもう俺以外に好きな人がいるみたいだし、二人つきりはもうまずいでしょ」

加奈子 「え、なんで……？」

学 「見りゃわかるよ。四年付き合ってたんだし」

加奈子 「（少し照れて）……学のやりたいことって何？」

学 「それは――」

学 のスマホにLINEの着信音。

学 「（スマホを見て）！」

### ○ 『パン職人・木村』・前

車が停まり、夏海が降りて来る。

その後、学のバイクが停まる。

学 「（夏海を見て）！……どうも」

夏海 「（学に）あなたも連絡貰って？」

学 「（頷く）」

二人、店内へ。

○ 同・厨房

夏海と学、入って来る。

夏海・学「！」

美紀がいる。

夏海「お母さん！　なんでいるの？」

美紀「あら、早かったわね」

奥から幸三が出て来る。

夏海「幸三さん！」

幸三「おお、来てくれたか」

学「おじさん、大丈夫なんですか？」

幸三「ん？　何がだ？」

学「いや、こんな連絡貰ったから、なんか

大怪我でもしたのかな〜って」

学、スマホを見せる。

幸三からのLINE、『緊急事態発生。』

すぐに来てくれ！』と送信されている。

夏海「私も。だから急いで来て……」

幸三「（苦笑し）それはすまない。いや、緊

急事態ってのは、これのことだ」

幸三、近くのテーブルに置いてあったハンバーガーを指す。

夏海・学「？」

幸三「前々から考案していて新作メニューが今日ようやく完成してな、君たちに一番に試食してもらおうと思って呼んだんだ」

学「うわ、美味そう」

夏海「中に挟んであるのって、白身魚のフライ？」

幸三「夏海ちゃん、好きだろ」

夏海「うん。あれ、でも白身魚好きなの、幸三さんに話したことあったっけ？」

幸三「（美紀に）もう話してもいいよな？」

美紀「……ええ」

夏海「？」

幸三「夏海ちゃん。君が小さいときから食べてるパンな、実はあれ全部、お母さんと二人で作ったものなんだ」

夏海「え？」

幸三「調理をしていたのは俺だが、食材はお母さんが決めていた。夏海ちゃんは何が好きで何が嫌いか、栄養バランスは取れているか、ちゃんと健康に育ってくれるか。それらをお母さんは必死で考えて、俺にいつも美味しいパンを作ってあげてほしいと頼んでいた」

夏海「……」

美紀「……夏海、あなたには寂しい想いたくさんさせたわね。本当にごめんね」

夏海「……なんで？　なんでそんな大事なこと、今まで隠してたの？」

美紀「……なんか言い出せなくて」

夏海「これじゃあ今まで怒ってた私が完全に悪いじゃん。馬鹿じゃん私（と泣き始める）」

美紀「夏海……（と抱きしめる）」

夏海「お母さん、ごめんなさい。ごめんなさい」

美紀「ううん……」



夏海、美紀の元で泣き続ける。

○ 同・前

車とバイクが停まっている。

○ 夏海の車の中

夏海、学が座っている。

二人の手にはハンバーガー。

学 「（食べて）美味しいですね」

夏海 「うん、美味しい」

学 「……」

夏海 「……私ね、本当はこの仕事大嫌いなもの」

学 「え？」

夏海 「教師って自分の子供より、他人ひとの子供のことばかり考えているでしょ。私の親もあなたと同じで、どっちも教師だったからさ全然家で構ってもらえなくて……寂しかった。家に一人ひとりでいるのが辛かった。教師って仕事が憎かった」

学 「じゃあなんでなったんですか？」

夏海 「憎かったからこそ、かな」

学 「え？」

夏海 「私のような子供を生み出さない、親がなれなかった教師になってやるって、子供の時決めたの。でもこの仕事が思っていた以上に大変。今のまま結婚して子供ができたなら、私と同じ経験をさせてしまいかもしれない。そう思って結婚からも、恋愛からも逃げてた」

学 「……俺もです」

夏海 「？」

学 「俺も小学校のとき似た経験していて……親が教師の家族は幸せになれないんだろうな、じゃあ俺がそれを変えてやるって思っ、教師目指したんですけどね」

夏海 「（苦笑し）馬鹿ね、私たち。親が教師でも幸せな家族なんかたくさんあるのに」

学 「ええ、大馬鹿野郎ですよ」

夏海 「……これからあなたはもう一回目指すの？」

学 「いや、教師はもういいかな。それよりやりたいことが見つかったんで」

夏海 「何？」

学 「（ハンバーガーを見て）この味を継ぎます。ここのパン、俺すごい好きだから。それにこのお店は……好きな人のお店でもあるし」

夏海 「え？」

学 「このお店があったから、あなたに出会えた。そんなお店無くなってほしくないですよ」

夏海 「……出会いは最悪だったけどね」

学 「（苦笑し）確かに……でも、お互い似ているところ色々あるし、似た者同士上手いくんじやないですかね。俺はそう信じています」

学、夏海に手を差し出す。

夏海 「……」

夏海、その手を握る。

二人、唇を重ねる。

○ 『パン職人・木村』・店内

幸三と美紀がいる。

幸三「ようやく夏海ちゃんも、学君も一歩踏

み出せたわけだな」

美紀「（嬉しく）ええ」

○ 音羽中学校・外観（二日後・昼）

チャイム音。

○ 同・正門前

夏海がいる。

○ 同・正門近くの校舎

加奈子、二人を見ている。

声「私、もう一つ勘違いしていたわ」

加奈子「！（と振り返り）松宮先生」

聖菜、出て来る。

聖菜「ある男性は夏海を好きになったフリを  
して本当に好きな人に近づこうとし、ま

たある女性は、その好きな人のために、  
自分の気持ちを押し殺して動いてあげた。  
今度は当たってるでしょ？」

加奈子「……」

聖菜「まったく、不器用にも程があるわ。気持ち  
ちはわかるけど、でも二度と親友をこん  
なことに巻き込まないで。いいわね」

加奈子「はい。すみませんでした」

聖菜「（苦笑し）恋は直球でいいのよ。少し  
手伝ってあげるとかそんなのだけでもい  
いのよ（と後ろを振り返る）」

二人の後ろから、大荷物を持った良平が  
しんどそうに歩いてくる。

良平「……（二人を見つめ）あ、新井先生、  
よかったら少し持ってきてくれませんか？」

加奈子「……喜んで」

加奈子、良平の元へ。

聖菜「（二人を見て微笑む）」

○ 同・正門前

夏海と学、商品の受け渡しをしている。

夏海 「（袋の中を見ながら）なんで倒れて  
いるのよ！」

学 「だから、それは横向きのハンバーガー  
なんだって。まあ、サンドウィッチみた  
いな感じ？」

夏海 「何よそれ。だったらサンドウィッチに  
すればいいじゃない。いや、そもそも私  
が注文したのは、普通のハンバーガーだ  
から」

学 「じゃあいらない？ 俺が初めて作った  
んだけど……」

夏海 「……もう仕方なく、だからね」

学 「（苦笑して）ありがとう、夏海」

夏海 「じゃあ気を付けて」

学、バイクで走り去る。

夏海 「（袋の中を見て）ホント最悪」

夏海、駐車場の方へ向かう。

『ブレッド・ラブ』（完）